

## 大学生の制御焦点とリスク志向の関連

三ツ村 美沙子\*<sup>1)</sup> 高木 浩人\*<sup>2)</sup>

本論文でわれわれは、大学生の制御焦点とリスク志向との関連について検討した。仮説は以下のようであった。仮説1：促進焦点が高いほどリスク志向は高くなる。仮説2：予防焦点が高いほどリスク志向は低くなる。相関分析の結果、促進焦点はリスク志向とは関連せず、仮説1は支持されなかった。しかし4つの状況のうち2つで、予防焦点が高いほどリスク志向が低いことが見出された。したがって仮説2は部分的に支持された。今後の研究への含意が議論された。

キーワード：制御焦点、促進焦点、予防焦点、リスク志向

Higgins (1997) が制御焦点理論 (regulatory focus theory) を提唱して以来、この理論についてさまざまな分野で研究が重ねられてきた。制御焦点は研究の目的によって、実験的な操作による状況依存的なものとして扱われる場合と (e.g., Shah & Higgins, 1997; Shah, Higgins, & Friedman, 1998; Friedman & Förster, 2001; Lockwood, Jordan, & Kunda, 2002)、個人特性として扱われる場合とがある (e.g., Shah & Higgins, 1997; Friedman & Förster, 2001; Lockwood et al., 2002)。個人特性として扱われる場合、まずはその先行要因が関心の対象となる。望ましい結果の有無に敏感であるという個人特性と、望ましくない結果の有無に敏感であるという個人特性は、どのような要因によってかたちづけられるのかという関心である。この点については Higgins & Silberman (1998) が示唆的である。Higgins & Silberman (1998) は、個人特性としての促進焦点、予防焦点<sup>1)</sup> に発達の要因、とりわけ親の養育態度が密接に関わっているとしている。養育 (nurturance)、すなわち与えることを志向した親の態度は促進焦点を、安全 (security)、すなわち守ることを志向した親の態度は予防焦点をそれぞれ植え付けるとの見解である。

この見解にヒントを得て、三ツ村・高木 (2012) は大学生を対象に親の社会的勢力 (social power) と制御焦点との関連について検討した。親の養育態度の一側面を切り取るために親の社会的勢力を取りあげたの

である。社会的勢力の把握には French & Raven (1959) の5類型 (報酬、強制、正当、専門、参照) に倣い、今井 (1996) の社会的勢力認知尺度から魅力勢力を測定する項目を除いた尺度を用いた。制御焦点の把握には Lockwood et al. (2002) の尺度を尾崎・唐沢 (2011) が邦訳した利得接近志向・損失回避志向尺度を用いた。ここで言う利得接近志向は促進焦点時に示される志向性、損失回避志向は予防焦点時に示される志向性のことを持っている (尾崎・唐沢, 2011)。分析の結果、父親からの社会的勢力が利得接近志向を有意に説明しており、とりわけ報酬勢力 (reward power) が有意な正の関連を示していた。しかし、父親からの社会的勢力は損失回避志向に対しては有意な説明力をもたなかった。母親からの社会的勢力は利得接近志向、損失回避志向のいずれに対しても有意な説明力を有していた。とくに報酬勢力が利得接近志向と有意な正の関連を示し、強制勢力 (coercive power) が損失回避志向と有意な正の関連を示していた。つまり両親からの報酬勢力が利得接近志向と有意な正の関連を示し、母親からの強制勢力が損失回避志向と有意な正の関連を示していたのである。これは、個人特性としての制御焦点に親の養育態度が密接に関わっているとした Higgins & Silberman (1998) を支持する結果である。

この結果を受けて三ツ村・高木 (2012) は、何らかの報酬を得るために親の影響を受け入れてきた子ども

\* 1) 愛知学院大学大学院心身科学研究科心理学専攻博士後期課程

\* 2) 愛知学院大学心身科学部心理学科

(連絡先) 〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 E-mail: misako.mitsumura@gmail.com

もは、次第にその他の場面においても利得の有無に敏感になり、個人特性としての促進焦点が強められると考察している。さらに、罰を避けるために母親の影響を受け入れてきた子どもは、徐々に損失の有無に敏感となり、個人特性としての予防焦点が強められるとの解釈を行っている。

このように、個人特性としての制御焦点についてはその先行要因が関心事項となるが、同様にその結果についても検討されてきた。たとえば石井 (2009) は消費者行動分野における制御焦点理論研究の展開についてレビューを行い、マーケティングにおけるこの理論の重要性について指摘している。それはとりわけ広告効果の研究において鮮明となる。その代表例が Pham & Avnet (2004) である。Pham & Avnet (2004) は促進焦点的な消費者は魅力的な広告の製品に対して好ましい評価を下し、予防焦点的な消費者は強い主張のなされた広告の商品に対して好ましい評価を下すことを見出している。この結果について Pham & Avnet (2004) は、促進焦点的な消費者は感情的な判断を行いやすいので魅力的な広告に敏感に反応し、予防焦点的な消費者は主張内容を重視するので強い主張の広告に敏感に反応すると解釈している。消費者を十把一絡げに扱うようなマーケティングに固執する企業は今やあまりないだろうが、「では具体的にどのような方略が有効なのか」という疑問に対して重要な示唆を与える結果である。

同じく制御焦点の結果に着目した研究として三ツ村・高木 (2013) は、大学生を対象に制御焦点と職業志向 (job orientation) との関連について検討している。職業志向とは、その人が職業生活の上で何を重視しているかを意味し、職業生活のあり方を方向づけるものである (若林・後藤・鹿内, 1983)。三ツ村・高木 (2013) では職業志向を若林・後藤・鹿内 (1983) の職業志向尺度30項目で測定した。この尺度は、職務挑戦、人間関係、労働条件の3因子を想定している。制御焦点は三ツ村・高木 (2012) と同じ尺度を用いた。分析の結果、促進焦点と職務挑戦は有意な正の関連を示し、予防焦点と職務挑戦が負の関連の傾向を示していた。人間関係、労働条件との間には有意な関連はみられなかった。つまり促進焦点的な人は職業選択において仕事の中身が挑戦的であることを求めるということである。Herzberg (1966) の主張する、満足度を高める上で仕事に責任や達成や承認に結びつく内容を埋め込むことの重要性は、とくに促進焦点的な人に対して顕著であることを伺わせる結果である。逆に予防焦点と職務挑戦が負の関連の傾向を示していたことは、

仕事に責任や達成や承認に結びつく内容を埋め込むことが予防焦点的な人には必ずしも重要ではない可能性を示唆している。個別配慮の重要性は至る所で主張されるが、その具体的な施策の方向性を指し示す結果であると考えられることもできるだろう。

このように制御焦点はさまざまな要因との関連が検討されてきたが、近年その結果として注目されているものに創造性 (creativity) がある。経済環境の不確実性が増し、世界的な競争が激化する事態では、企業にとっての革新や業績の鍵は従業員の創造性が握っている (Sacramento, Fay, & West, 2013)。これはとくに企業に限った話ではなく、現代社会のあらゆる場面で創造性というものが問われていると言えるだろう。その重要性に疑問を呈するような見解は想像しにくい。このように創造性が注目されるなか、それに影響を及ぼす可能性のある要因として制御焦点がクローズアップされるわけである。

では、制御焦点と創造性との間にはどのような関係があるのだろうか。Higgins (1997) によれば、促進焦点によって生じる処理スタイルは創造的思考を高め、予防焦点によって生じる処理スタイルは創造的思考を抑制する。なぜなら、促進焦点が活性化している状況は、環境が有益であるという信号を受け取る状況を意味しており、そのような状況では人はリスクで探索的な処理スタイルを高める (Friedman & Förster, 2001)。このことが創造性へと結びつくと考えられるわけである。逆に予防焦点が活性化している状況は、環境が脅威であるという信号を受け取る状況を意味しており、そのような状況では人はリスク回避的になり、警戒処理スタイルを高める (Friedman & Förster, 2001)。このことが創造性を低下させることになると考えられるわけである。

このような制御焦点と創造性の間に介在する処理スタイルについて着目し、制御焦点との関係について検討を行っている代表的な研究に Crowe & Higgins (1997) がある。Crowe & Higgins (1997, study 2) では、信号検出理論を用いて記憶の再認課題を実施している。この研究は制御焦点を操作した後、ある単語を提示し、それが事前に記憶した単語かどうかを “Yes” か “No” で回答させるというものである。この実験の結果、促進焦点群は “Yes” の反応が多く、一方の予防焦点は “No” の反応が多い傾向にあることが明らかとなった。“Yes” の数は信号検出理論でいう “hit” を重視する傾向を意味していることから、促進焦点の強い人にはリスクな決定バイアスが働いていると考

えられる (Crowe & Higgins, 1997). その一方, “No” の数は信号検出理論という “correct rejection” を重視する傾向を意味していることから, 予防焦点の強い人は保守的な決定バイアスが働いていると考えられる (Crowe & Higgins, 1997).

その後, Friedman & Förster (2001) は制御焦点と創造性との関連について検討するために5つの実験を行っている. このうち4つの実験では制御焦点を実験的に操作し, 1つの実験では個人特性としての制御焦点を扱っている. これらの実験を通して Friedman & Förster (2001) は, 予防焦点よりも促進焦点が創造性を高めることを示しており, また同様の結果は Crowe & Higgins (1997, study 1) でも報告されている. 以上のことから, 予防焦点に比べて促進焦点が創造性を高めるとの結果はかなり一貫したものであると推測されよう. しかも, 制御焦点と創造性の関連を検討している研究では, リスキーな情報処理をするか, リスク回避的な情報処理をするかが, 媒介変数として位置づけられていることがわかる.

しかし, 我々の知る限り, 我が国において制御焦点とリスク志向, 創造性との関連を検討した研究は見当たらない. そこで本研究では, 端緒として制御焦点とリスク志向との関連について検討することとした. これまでの議論に基づいて, 以下の2つの仮説について検証することを目的としている.

仮説1: 促進焦点が高いほどリスク志向は高い

仮説2: 予防焦点が高いほどリスク志向は低い

## 方 法

### 調査対象

総合大学に在籍する大学生72名 (男性38名, 女性34名).

### 質問紙の構成

**制御焦点:** 制御焦点について測定するために, 促進焦点と予防焦点の2因子を想定して作成された Lockwood et al. (2002) の尺度の邦訳版 (尾崎・唐沢, 2011) のうち12項目を使用した. 回答は「あてはまらない: 1」～「あてはまる: 5」の5件法で求めた.

**リスク志向:** Wallach, Kogan, & Bem (1962) がリスキー・シフトの実験で用いた12の仮想状況のうち, 「状況1 (Wallach らでは1): 高給与だが不安定な職へ転職するか」, 「状況2 (Wallach らでは9): 捕虜で

いるか脱出するか」, 「状況3 (Wallach らでは2): 危険だが完治の可能な手術を受けるか」, 「状況4 (Wallach らでは12): 考えの違う婚約者と結婚するか」の4つの状況を用いた. 状況は Wallach ら (1962) のサマリー (p. 77) を参考に, 筆者が少し詳しく記述し直した.

当事者が直面しているこれらの葛藤について回答者が適当な選択を助言するという設定で, 「最低限どの程度の成功の見込みがあれば冒険的な行動をとるよう勧めるか」と尋ねた. 回答は「1: 10%の成功の確率があれば冒険的な選択肢をとるよう勧める」, 「2: 30%の成功の確率があれば冒険的な選択肢をとるよう勧める」, 「3: 50%の成功の確率があれば冒険的な選択肢をとるよう勧める」, 「4: 70%の成功の確率があれば冒険的な選択肢をとるよう勧める」, 「5: 90%の成功の確率があれば冒険的な選択肢をとるよう勧める」, 「6: 冒険的な選択肢をとるようには勧めない」で求めた. したがって値が小さいほどリスク志向的であることを意味している.

### 手続き

授業時に質問紙を配布, 回答を求め, 回収した. 調査は2013年5～7月に実施された.

## 結 果

### 信頼性分析

制御焦点の各焦点6項目ずつについて, Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した. 促進焦点が  $\alpha=.742$ , 予防焦点が  $\alpha=.769$  と許容範囲の値が得られたことから, 下位尺度項目の評定値をそれぞれ合計した得点を各焦点の得点とした.

### 相関分析

制御焦点とリスク志向の関係を検討するため, 各焦点の得点と4状況の評定値の相関係数を算出した. その結果を示したのが表1である. なお, 4状況の評定値のうち「6: 冒険的な選択肢をとるようには勧めない」は間隔尺度として扱えないため, 分析から除外してある.

分析の結果, 促進焦点については有意な関連はみられず, よって仮説1は支持されなかった. 一方, 予防焦点と状況2 (脱出), 予防焦点と状況3 (手術) の間で有意な正の相関がみられた (順に  $r=.274, p<.05$ ;  $r=.255, p<.05$ ). つまり, 予防焦点が強いほど状況2や

表 1 制御焦点と各状況のリスク志向得点との相関

	促進焦点	予防焦点	状況 1	状況 2	状況 3	状況 4
促進焦点	$\alpha=.742$					
予防焦点	.236*	$\alpha=.769$				
状況 1	.121	.046	—			
状況 2	.142	.274*	.351**	—		
状況 3	.199	.255*	.291*	.386**	—	
状況 4	-.093	.050	.087	-.134	-.248	—

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ 

状況 3 においてはリスクを志向しないことが示された。したがって、仮説 2 は状況 2 と状況 3 のみで支持となった。

### t 検定

状況 4 (結婚) において、「1 : 10% の成功の確率があれば冒険的な選択肢をとるよう勧める」～「5 : 90% の成功の確率があれば冒険的な選択肢をとるよう勧める」と回答した人 (59 名) をリスク志向群、「6 : 冒険的な選択肢をとるようには勧めない」と回答した人 (13 名) をリスク回避群として、制御焦点の差を検討するため  $t$  検定を行った。その結果、促進焦点についてはリスク志向群とリスク回避群の間に有意差がみられ ( $t(70)=2.077, p<.05$ )、リスク志向群のほうがリスク回避群よりも促進焦点が高いことが示された。予防焦点については有意な結果は得られなかった ( $t(69)=1.749, n.s.$ )。

なお、その他の状況では、状況 1 がリスク志向群 66 名、リスク回避群 6 名、状況 2 がリスク志向群 69 名、リスク回避群 3 名、状況 3 がリスク志向群 70 名、リスク回避群 2 名と分析を行うには不適切なサンプル数であると判断し、分析を実施しなかった。

## 考 察

本研究では制御焦点とリスク志向との関連を検討することが目的であった。以下では、本研究の結果から仮説について考察を述べる。

### 仮説の検討

相関分析の結果、促進焦点と 4 つの状況におけるリスク志向との間には全く関連がみられず、仮説 1 は不支持となった。その理由として、以下の 4 つが考えられる。

まず、先行研究と本研究ではリスク志向の測定方法

が異なっていることが挙げられる。先行研究では信号検出理論に基づいた再認記憶課題や (e.g., Crowe & Higgins, 1997)、車の運転といった実際の行動 (e.g., Hamstra, Bolderdijk, & Veldstra, 2011; Werth & Förster, 2007) などの方法を用いて、促進焦点とリスク志向あるいはリスク・テイキング行動との間に正の関連を報告してきた。本研究で我々が使用したリスク志向の測定方法が制御焦点とリスク志向との関連を明らかにする上で妥当な方法であるのかどうか、今後より詳細な検証が必要であろう。

2 つめは、個人特性的な制御焦点の測定に Lockwood et al. (2002) の尺度を用いたことである。制御焦点の個人差を測定する尺度には Lockwood et al. (2002) の尺度以外にも、さまざまな尺度が開発されている (e.g., Higgins, Friedman, Harlow, Idson, Ayduk, & Taylor, 2001; Shah et al., 1998)。そのため研究によって使用される尺度も異なり、研究結果への影響も少なからず存在するのではないかと推測される。制御焦点に関する 5 つの尺度を比較した Haws, Dholakia, & Bearden (2010) の研究では、異なる尺度間の相関が低いことが指摘されており、研究の文脈に応じて使用する尺度を慎重に選択するべきだとの見解を示している。どのような文脈でどのような尺度を使用することが適切であるのかについて、さらに議論を深めていく必要がある。

3 つめは先行研究とのサンプルの違いである。先行研究では主に欧米人を対象に調査、実験が行われているが、そのようなサンプルの違いも予測と異なる結果が生じた原因の一つとして考えられるのではないだろうか。制御焦点における文化差の研究も進められつつあるが (e.g., Chen, Ng, & Rao, 2005)、我が国においても制御焦点研究のさらなる蓄積が待たれるところである。

4 つめに、分析時にリスク回避群を除外したことが挙げられる。状況 4 の  $t$  検定ではリスク志向群のほうがリスク回避群に比べて促進焦点が高いことが示されている。この結果は仮説 1 を支持する方向にあり、リスク志向を測定する際にあらかじめ選択肢を間隔尺度に統一しておけば、異なる結果が得られたかもしれない。

次に、予防焦点について、状況 2、状況 3 においては予測と一致する結果がみられたものの、状況 1 や状況 4 においては関連がみられず、仮説 2 は一部支持となった。これは状況の性質の違いによるものであろう。状況 2 (脱出) と状況 3 (手術) においては、失敗するこ



とは致命的である。一方の状況1（転職）と状況4（結婚）は失敗をしたとしても、命を落とすような事態には至らない。予防焦点は安全の欲求との関連が指摘されているが（Higgins, 1997; Higgins & Silberman, 1998）、予防焦点の強い人は安全を志向しやすいためにこのような致命的な失敗を避けようとし、結果的にリスク志向が低下するのではないだろうか。このことから、制御焦点とリスク志向との関係については、リスクの中身を考慮する必要がある。また、損失状況においてリスクな選択のみが損失を無くす可能性がある場合、予防焦点的な動機づけがリスク志向を高めるとの報告もされており（Scholer, Zou, Fujita, Stroessner, & Higgins, 2010）、本研究の結果にはさまざまな要因が複雑に絡んでいる可能性がある。

## 今後の課題

本研究では、我が国における制御焦点と創造性との関連を検討するための端緒として、制御焦点とリスク志向との関連について検討を行った。今後は制御焦点、リスク志向が創造性に及ぼす影響についても研究を進めていく必要がある。創造性の測定には数々の方法が試みられているが（e.g., Friedman & Förster, 2001）、これをどのように捉え、どの側面を重視するかによっても測定方法は異なってくると考えられる。研究の主旨に合った定義、測定方法を選択することが重要である。

## 注

- 1) 三ツ村・高木（2012, 2013）では prevention focus の日本語訳として「抑制焦点」を用いているが、研究によって異なる訳（予防焦点, 防衛焦点, 防止焦点など）が使用されているため、研究間で混乱をまねく可能性がある。よって、本研究では多くの研究者が使用し、かつ prevention focus の内容をより反映していると判断される「予防焦点」を訳語として使用することとした。

## 引用文献

- Chen, H. (A), Ng, S., & Rao, A. R. (2005). Cultural differences in consumer impatience. *Journal of Marketing Research*, **42**, 291–301.
- Crowe, E., & Higgins, E. T. (1997). Regulatory focus and strategic inclinations: Promotion and prevention in decision-making. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **69**, 117–132.
- French, J. R. P., Jr., & Raven, B. H. (1959). The bases of social power. In D. Cartwright (Ed.), *Studies in social power*. MI: Institute for Social Research. pp. 150–167.
- Friedman, R. S., & Förster, J. (2001). The effects of promotion and prevention cues on creativity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 1001–1013.
- Hamstra, M. R. W., Bolderdijk, J. W., & Veldstra, J. L. (2011). Everyday risk taking as a function of regulatory focus. *Journal of Research in Personality*, **45**, 134–137.
- Haws, K. L., Dholakia, U. M., & Bearden, W. O. (2010). An assessment of chronic regulatory focus measures. *Journal of Marketing Research*, **47**, 967–982.
- Herzberg, F. (1966). *Work and the nature of man*. Cleveland: World. 北野利信（訳）（1968）. 仕事と人間性 東洋経済新報社
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, **52**, 1280–1300.
- Higgins, E. T., Friedman, R. S., Harlow, R. E., Idson, L. C., Ayduk, O. N., & Taylor, A. (2001). Achievement orientations from subjective histories of success: Promotion pride versus prevention pride. *European Journal of Social Psychology*, **31**, 3–23.
- Higgins, E. T., & Silberman, I. (1998). Development of regulatory focus: Promotion and prevention as ways of living. In J. Heckhausen & C. S. Dweck (Eds.), *Motivation and self-regulation across the life span*. New York: Cambridge University Press. pp. 78–113.
- 今井芳明（1996）. 影響力を解剖する — 依頼と説得の心理学 — 福村出版
- 石井裕明（2009）. 消費者行動研究における制御焦点理論研究の展開 商学研究科紀要, **68**, 147–161. (早稲田大学大学院商学研究科)
- Lockwood, P., Jordan, C. H., & Kunda, Z. (2002). Motivation by positive or negative role models: Regulatory focus determines who will best inspire us. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 854–864.
- 三ツ村美沙子・高木浩人（2012）. 制御焦点の先行要因、関連要因、結果 愛知学院大学論叢心身科学部紀要, **8**, 45–51.
- 三ツ村美沙子・高木浩人（2013）. 大学生における職業志向と制御焦点の関係 愛知学院大学心身科学研究所紀要心身科学, **5**, 45–49.
- 尾崎由佳・唐沢かおり（2011）. 自己に対する評価と接近回避志向の関連性：制御焦点理論に基づく検討 心理学研究, **82**, 450–458.
- Pham, M. T., & Avnet, T. (2004). Ideals and oughts and the reliance on affect versus substance in persuasion. *Journal of Consumer Research*, **30**, 503–518.
- Sacramento, C. A., Fay, D., & West, M. A. (2013). Workplace duties or opportunities? Challenge stressors, regulatory focus, and creativity. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **121**, 141–157.
- Scholer, A. A., Zou, X., Fujita, K., Stroessner, S. J., & Higgins, E. T. (2010). When risk seeking becomes a motivational

- necessity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **99**, 215–231.
- Shah, J., & Higgins, E. T. (1997). Expectancy×value effects: Regulatory focus as determinant of magnitude and direction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 447–458.
- Shah, J., Higgins, E. T., & Friedman, R. (1998). Performance incentives and means: How regulatory focus influences goal attainment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 285–293.
- 若林満・後藤宗理・鹿内啓子 (1983). 職業レディネスと職業選択の構造：保育系，看護系，人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連 名古屋大學教育學部紀要，教育心理学科，**30**, 63–98.
- Wallach, M. A., Kogan, N., & Bem, D. J. (1962). Group influence on individual risk taking. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **65**, 75–86.
- Werth, L., & Förster, J. (2007). The effects of regulatory focus on braking speed. *Journal of Applied Social Psychology*, **37**, 2764–2787.

最終版平成25年7月26日受理

## The Relationship between Regulatory Focus and Risk Orientation of Undergraduate Students

Misako MITSUMURA, Hiroto TAKAGI

### **Abstract**

The purpose of this study was to examine the relationship between regulatory focus and risk orientation of undergraduate students. The authors' hypotheses were as below; H1: the higher the promotion focus is, the higher the risk orientation is, H2: the higher the prevention focus is, the lower the risk orientation is. Correlational analysis revealed that promotion focus didn't correlate to risk orientation, so H1 was not supported. But in 2 of 4 situations, we found that the higher the prevention focus was, the lower the risk orientation was, so H2 was partially supported. Implications for future research were discussed.

Keywords: regulatory focus, promotion focus, prevention focus, risk orientation

